

3年学年だより

平成30年 6月6日(水)
島本町立第一中学校
校長 松本 剛
3年生 学年グループ

「知覧平和学習を終えて」

5月23日、修学旅行での平和学習として知覧特攻平和会館に行きました。語り部である川床剛士さんのお話を聴いたあと、当時の特攻機や特攻隊員の遺書、遺品、記録等貴重な資料を見学しました。この知覧陸軍特攻基地から飛び立ち、命を失った439人の特攻隊員の思いに触れ、「生きる」ことや「命」について深く考えられたでしょうか。自分が生きている日本があり、自分たちの生活がある「今」は過去の積み重ねです。

みんなの感想文の一部を紹介します。

私たちの学校ではこの学年で修学旅行での平和学習が終わると聞きました。そして戦争経験者の方もどんどん亡くなっておられます。ですから私たちが後の世代に戦争の辛さ、平和への感謝について伝えていけたらいいと思います。人から聞くということは動画などを見るよりもよいことだと思います。動画などでは分かりやすいこともありますが、すべてが本当なのかは分かりません。しかし、お話を聴くとその人がどういう気持ちで亡くなられたのか家族の思いはどんなものだったかまで知れて、本当に貴重な経験ができたなと思います。

戦争で亡くなった人たちは、死ぬのがいやな人もいたと思うし、もっともっとやりたいことや夢を持っていたと思うから、この人たちは生きてくても死ぬしかなかったから、川床さんもおっしゃってましたが「死にたい」や「死ぬ」など、決して簡単に言うてはいけないし、自殺したいと考える人もこの世の中にはいるかもしれないけど、戦争でがんばって戦ってくれた人のことを考え、生きなければならぬと、心から思いました。

展示物を見てまわっていても、丁寧な字で親への思いをつづったものが多いように見られました。そして、どれも暗くどんよりした寂しそうな内容でなく、明るい元気な印象を受けられるものでした。

平和の尊さについては、いまでは当たり前になっている平和ですが、昔の特攻隊の方々が命をかけてつないでくれて今があるんだなあとと思うと感謝しかありません。特攻隊の隊員になっていた人たちが今平和に暮らせている自分たちと2、3歳しか変わらないと知って非常にショックでたまりませんでした。今、こうして自分たちがこの場に存在できるのも自分たちの母親、父親たちとその先祖の方々のおかげだと思いました。機体に爆弾をくくりつけて飛んでいって体当たりするのは本当に怖かったと思います。そんな戦争は今後一切おきないでほしいと思います。

私たちの地元島本町では楠木正成・正行の父子別れの所、通称楠公公園、楠公さんと呼ばれる場所は、とても身近な場所です。僕は今まで菊水のマークを見ても戦争に関連づけて嫌うなんてことはありませんでした。しかし、戦争とこれほど深いかわりがあったからには嫌う人も多いかと思いました。でも、今回の学習を通して考えると、特攻隊員の信じた大楠公の精神は後の日本の復興への願いをふまえてできた、今から特攻へ行き命をささげることへの決心の表れだったのではないかと思います。そう考えれば私たちの楠公公園も、その希望に満ちた場所だったのではないかと思います。

川床さんの話は、事前に学習してきたつもりだったけど、知らなかったことのほうが多くて、分かりやすさも全然違うと思った。やっぱり資料や教科書で学習するのも大切だけど、直接その話のプロの話聴くのとでは言葉の重さが違うと思った。戦争をしているときはパイロットの倍率が40～50倍だったと聞いてびっくりした。危険なのにしたいと思う人がいるということは自分の命を日本に捧げる覚悟で生きている人たちが多かったということだし、今と考え方が違うかもしれないけど、それを否定するのではなく、その考え方もあったんだなと思えるようにしたい。

死ぬ前にもかかわらず、笑顔で写真に写っていた少年飛行兵の人がその時どんな気持ちだったのかははっきりとは分からなかったけれど、嬉しいから笑っているのではなく、みんな死ぬのが怖くて、大きな夢があったからほんとは悔しい思いをしている、と川床さんから聞き、こんなことを思っても写真には笑顔で写るとするのがとてもすごくて、尊敬しました。高校生くらいの年で死ぬというのは今は当たり前のことじゃないけど、その時は当たり前のように思っていたんだと思い、今、高校の進路のことで悩んでいることも平和で、幸せなことなんだということに気付かされました。

黒島であった同期生との絆の話に心を打たれました。火傷の薬を同期生のために飛行機から島に落としたことも、その人を基地まで送り届けるために長い距離を舟で連れて行ってあげた島の人、みんな誰かのために一生懸命になっていて、本当に美しいことだと思いました。これこそ、トメさんの言葉「誰かのために生きようと行動した瞬間 命・瞳が輝き出す」どおりだと思います。けれども、その薬を届けてくれた人も特攻によって亡くなってしまっ...川床さんは「命の尊さとは長生きをすることではない。命を大切にすること・一生懸命生きること・感謝を持って伝え合うことだ」とおっしゃいました。その言葉を胸に、次の世代である私たちは、どんなときでも一生懸命を楽しみ、また勉学に励んでいこうと思います。

「君たちは大楠公だ」と言われ、沖縄の空に飛んでいった特攻隊員の心情は皆目見当もつきません。ですが死への恐怖、愛しい人や大切な家族への切なる願いは少し分かるような気がします。それを知る手がかりとなるのはやはり遺書でしょう。「あなたの幸せを願う以外何もない」「お母さん、大元気で、でっかい奴を沈めます」皆、大切な人の幸せと命のことを案じているのです。